

わが家宝

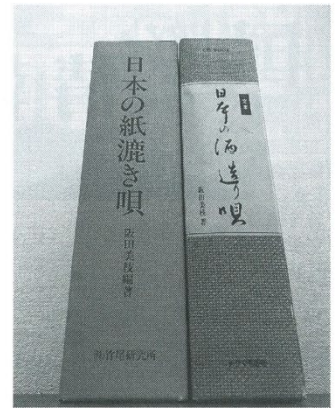
筆者は、民謡に興味があります。車を運転するときには、民謡かお経を聴いています。気持ちが落ち着くので、安全運転につながると信じているのですが……。

そこで、今回は民謡の話です。日本には、4～5万曲があるそうです。そのほとんどは、仕事唄。みんなの力を集中するための唄（土搗唄＜どつきうた＞や漁唄など）、1人作業の退屈さをしのぐ唄（馬子唄、糸繰り唄）、野外での1人作業時に、お互いの安全確認を行う唄（草刈唄）。唄に託して、相互の想いを異性に伝えたとも聞きます。唄は、さまざまな機能を果たしていました。

いま、私たちが聴くのは、民謡歌手などの唄です。聞かせどころを考え、技巧を凝らした唄。一方、作業唄は、働く人が日常的に口にした唄で、銜い（てらい）はありません。何回も聴くと、歌い手の生業が思い浮かび、深い味わいがあります。作業頭の音頭に呼応する作業員の掛け合いは、エールの交換にも聞こえます。1人唄は、鼻歌のようです。聞いているこちらにも、肩の力が抜けます。

このような作業唄を記録し、CDにまとめた方がおられます。阪田美枝さん。同志社女子大学で図書館司書などをしながら、杜氏（とうじ）や紙漉き（かみすき）職人を全国に訪ね、仕事唄を録音したCDブックを編集されました。1992年に「日

中嶋哲夫の「人事も歩けば」



▲「日本の紙漉き唄」と「日本の酒造り唄」

本の紙漉き唄」、1999年に「日本の酒造り唄」を出版されています。どちらもCD4枚組に加えて、楽譜と歌詞をまとめた冊子がセットになっています（ちなみに、紙漉き唄は著名な民俗学者も認識していないマイナーな仕事唄です）。紙漉き唄をまとめた本は総和紙製。生産者から提供されたそうです。手になじみ、眺めても、聴いても、触っても楽しい仕上がりです。

CDには、阪田さんの笑い声や、歌い手との会話が収録されていることもあります。ともに楽しみながら、録音された雰囲気伝わります。冊子には、著者の文章も掲載されていますが、それは脇役。感謝の気持ちを伝える文章です。阪田さんは、1999年に退職されました。筆者がお目にかかる機会はありません。ただ、2冊のCDブックから、そのお人柄が想像できます。自分が素晴らしいと思ったことを記録する。揺るがずに、ひたすらに脇役として記録し続けた方。そんな方だと想像しています。見習いたいところです。

（MBO 実践支援センター代表）